

京都大学	博士（人間・環境学）	氏名	瀬本 阿矢
論文題目	転用と変容 -日本の女性詩人たちによるシュルレアリスム受容を中心に-		
(論文内容の要旨)			
本論文は、20世紀前半の重要な芸術運動であるシュルレアリスムを、「ヨーロッパ的原理」と「男性原理」を内包する芸術活動であるとし、それらの性格が日本の女性詩人たちによる受容にどのような影響を及ぼしたかについて論じたものである。 そこで筆者は、次のような三段階からなる手続きを取っている。まず欧米の女性文筆家のひとりアナイス・ニンにおいて「男性原理」を内包するシュルレアリスムがどのように女性的なものへ変化したかを検討する。次いで「ヨーロッパ的原理」を内包するこの芸術活動が、どのように日本的なものに変化したか瀧口修造を例にとって明確にする。そしてそのうえで、戦前から戦後にかけてシュルレアリスムに関わった日本の女性詩人たちの作品に焦点を当て、なぜ彼女らがシュルレアリスムという芸術活動に魅了されたか、またどのようにシュルレアリスムを受容したかといった点について検討する。 第1章では、まずシュルレアリスムが席卷していた時代の、欧米におけるシュルレアリスムと女性芸術家の関係について考察している。シュルレアリスムが本質的には男性中心的な原理に基づいていることは、男性シュルレアリストたちが描き出す女性像が、子供のような特徴を持ちつつも男性を魅了する「ファム・アンファン」という、あくまで男性側から見た女性像であることにも現れている。にもかかわらず、多くの女性芸術家はこの芸術活動に魅了された。そこで、女性の地位や自主性を主張する女性芸術家が、そうしたシュルレアリスムに影響された理由を探るため、女性芸術家の代表として、フランスに生まれアメリカで活躍した作家であるアナイス・ニンの作品を詳しく検証し、ニンが自己のアイデンティティーを問う方法としてシュルレアリスムを受け入れていたと主張している。 第2章では、「ヨーロッパ的原理」としてのシュルレアリスムがどのように日本独自の芸術活動へと変容していったかについて考察している。そのため、日本のシュルレアリスムを語る上で欠かすことのできない人物である瀧口修造の仕事を取り上げている。瀧口はシュルレアリストたちによって発表された詩や芸術論を翻訳し、日本の雑誌に次々と発表していったが、その翻訳は日本の画家たちにシュルレアリスム的な表現形式を取り入れさせる大きな原因の一つとなった。そこで本章では、瀧口によるダリの著作の翻訳やダリの絵画に関する瀧口による紹介文をダリの原文と比較検討しながら、瀧口による極度の意識や誤訳を検証し、そのうえで、日本におけるシュルレアリスムの形成過程が、そうした意味で偏向した受容に基づいていると主張している。 第3章では、第1章と第2章の研究結果を踏まえながら、「男性原理」であり、なおかつ「ヨーロッパ的原理」であるシュルレアリスムが、日本の女性芸術家たちにおいてどのように受容され、変容していたかを検討するため、シュルレアリスムと深い関係			

にあった日本の女性詩人である上田静栄（1898 - 1991）と左川ちか（1911 - 1936）の二人に焦点を当てている。特に女性が創作活動をするのが反社会的と考えられていた時代に、彼女らがどのようにフランスのシュルレアリスムから影響を受け、独自の世界を作り上げたかについて考察している。この研究を通してまず明らかになることは、日本の女性文筆家は、シュルレアリスムの手法やモチーフを取り入れながらも、女性の立場に関する各人の考え方を色濃く作品に反映させているということである。つまり上田は、あくまで妻という社会的立場を重視した文章を自らの詩集のあとがきに掲載するなど、独自の詩作を行いながらも当時の日本における女性の立場を受け入れていた。それに対して左川は、自らを女性として意識しつつも、さらに一人の人間として大胆にシュルレアリスムのモチーフを駆使して詩作した。とはいえ筆者は、こうした違いにもかかわらず、彼女らの作品においてシュルレアリスムは、もはや「男性原理」や「ヨーロッパ的原理」に基づくのではなく、彼女ら独自の表現方法へと変容をとげていると主張している。

以上のように、本論文は、「男性原理」でありかつ「ヨーロッパ的原理」であるシュルレアリスムが、いかにして日本の女性文筆家に受容され、彼女らの作品の中で変容しているかについて、様々な角度から検討している。シュルレアリスムの影響を受けた上田や左川など日本の女性詩人たちによる試行錯誤を通して見えてくるのは、日本社会の中で女性が当時置かれていた立場が、女性詩人としての活動を限定すると同時に、様々な形で創作の原動力ともなっていたということである。

(論文審査の結果の要旨)

本博士号学位申請論文は、ヨーロッパ文化の中で生まれ、また男性芸術家中心に形成されたシュルレアリスムという芸術運動が、全く異なる文化的基盤を持つ日本において、しかも男性ではなく女性の詩人たちによって受容される時、そこにいかなる問題が関わり、いかなる変容が生じるのかという、鋭敏な批判能力と広範な知識を要求するテーマに果敢に挑んだ論文である。

筆者は、論考を以下のような三段階で構築している。すなわち、まず欧米の女性芸術家にとってシュルレアリスムの受容がどのような問題を提示するか、ついで日本の芸術家にとってシュルレアリスムの受容がどのような問題を提示するか、という二点を検討した後、そこで得られた知見を基盤として日本の女性芸術家によるシュルレアリスムの受容を考察するのである。周到な論考であると評価できる。しかもそれぞれの章では、女性とシュルレアリスム（第1章）、日本とシュルレアリスム（第2章）そして日本の女性芸術家とシュルレアリスム（第3章）に関する一般的な考察を行った後に、アナイス・ニン、瀧口修造、上田静栄・左川ちかという具体例について詳しく作品や文章の分析を行っている。ヨーロッパから遠く離れた日本で、しかも女性の芸術家がシュルレアリスムを受容する際に直面しなければならなかった問題を明らかにするという本論文の課題は、したがってかなりの説得力を持ってやり遂げられていると評する。

個々の章で、とりわけ興味深い論考が見られたのは、第2章で瀧口修造の翻訳の間違いや過度の意識をダリによる原文と比較しながら指摘している点、また第3章で左川独自の表現に見られるシュルレアリスムからの影響を、ダリの映画シナリオ（『アンダルシアの犬』）にまで探索の対象を広げて検討している点である。第3章では、上田や左川の詩の文体的特徴を、フランス語からの翻訳において生じる言語上の特徴と関係づけている点も新鮮であった。

瀧口修造研究としては、彼とシュルレアリスムの創始者であるアンドレ・ブルトンとの交流に関する研究はある程度進んでいるものの、彼とサルバドール・ダリとの関係や、とりわけ彼がダリをどのように日本に紹介したかについての詳細な研究はまだなされていない。また上田や左川などのようなシュルレアリスムの影響を受けた日本の女性詩人たちについても研究はまだあまり進んでいない。そうした分野において、本論文は今後重要な文献となるであろう。

ただし第1章、第2章に関しては論考に何の問題もなかったわけではない。上記のような肯定的な審査結果は、あくまで以下のような指摘を行ったうえでのものであることを付け加えておきたい。

まずシュルレアリスムという芸術運動の定義についてであるが、とりわけ「男性原理」、「ヨーロッパ的原理」という概念によって、筆者が何を理解しているかが必ずしも明解ではない。特に後者の場合、シュルレアリスムにはヨーロッパ文化の伝統を否定しようという反ヨーロッパ的な面もあるが、そうした面が筆者の研究とどうつな

がるのかが明らかにされていない。また、アナイス・ニンや瀧口修造のみによって、女性芸術家とシュルレアリスムの関係あるいは日本とシュルレアリスムの関係を代表させることにも、少なからず問題がある。今後さらに研究対象を広げることを期待したい。一方、個々の作家についてさらに深い考察が求められるという点も指摘しておきたい。例えばアナイス・ニンでは彼女の他の作品との連関が問われていない。また瀧口修造の誤訳や過度の意識については、それが彼の業績全体の中で何らかの必然性があるかどうかは問われていない。これらの点に関しても、今後さらに研究を深めることを期待したい。

しかしながら、本論文の中心である第3章の論考、すなわちヨーロッパから遠く離れた日本で女性の芸術家がシュルレアリスムを受容する際に直面しなければならなかった問題についての論考は非常に優れたものであった。

以上のように、いくつかの点において研究の伸展を今後さらに期待するが、全体としては、初めにも述べたように、説得力を持った優れた論文であった。よって本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値を持つと認める。また平成23年7月25日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

Webでの即日公開を希望しない場合は、以下に公表可能とする日付を記入すること。

要旨公開可能日： 年 月 日以降